



俳句同好会 二〇二一年度 自選三句

美保子

一汁一菜帰雁うながす風の音
帰雁以後月にかがよふ潦
晩景の兀と涼しき利尻岳

君 予

木道の右に左に春の水
月島は長屋打ち水もんじや焼き
先客の猫そつと押し日向ぼこ

雅 子

夏菊の橙色を二本ほど
雁が音や螺鈿紫檀の五弦琵琶
ぽつぺんの音よく通る母の家

勢以子

ひとつづつ雪解しづくの色たがふ
すかんぼや山羊に短かき遊び綱
山襷に藍を重ねて冬隣

信 子

川音の先の先なる桐の花
古里の昔に出会ふ泡立草
二風谷のチセからチセへ秋の風

麻利子

十勝野は曇りのち晴れ豆の花
秋ざくら電車静かに過ぎゆけり
姉の味母の味なり雑煮椀

真 理

杉の葉に星の降り来る青葉木菟
一輛の秋の日差しを乗せゆけり
桃吹くや転校生の机来て

房 子

夏蝶の睦ぶや馬頭観世音
団栗の落ちてしばらく日のぬくみ
つくばひの水面華やか黄落期

好 子

『訴歌』(ハンセン病療養者の歌集)賜はりて
歌を詠む意味問はれたり聖五月
十勝野の黒き大地や秋の虹
初雪の光とどめて枝の先

節 子

初音聞く森は光の束なせり
新緑の風吹き渡り沼青し
百合挿して遺影に話すけふのこと

絢 子

明日は引く白鳥今日は田に遊び
葉の雫ぼろろと転げ明易し
豆腐屋に朝の挨拶青すだれ

素 子

マカロンの七色五月来たりけり
花合歡の紅のほのかに夜の雨
誰彼の遠し木枯鳴る夜は

なにはともあれ

陽 美保子

新型コロナウイルスが蔓延し始めて三年目になります。閉塞的な生活を余儀なくされ、体調を崩される方も多く、どうしても気分は沈みがちになりますが、こんなとき四季の豊かな国に住んでいるありがたさをつくづく感じます。

冬が終われば必ず春が来ます。そう思うと、いつかはこの災いも収まりまた明るい日常が戻るだろうと信じて待つことができます。特に雪深い北国では、春が来る喜びはひとしおです。

なにはともあれ山に雨山は春

飯田龍太

春になると、いつも心の中で呟く一句です。このしみじみとした懐かしさ。何度も心の中でつぶやいていると、雨が山だけでなく、心の中にも沁みわたり、心を潤してくれます。どこか緊張がほぐれてほっとした気持ちになります。なにはともあれ春を迎えることができ、自分が今ここに居ることに感謝したい気持ちになります。俳句はたった十七文字の文芸ですが、こんなにも心を癒してくれることに驚き、魅了されます。どんな時でも、身近に豊かな自然と俳句があって良かったと思うこの頃です。

